

青年期における化粧品障害の実態調査と保健指導への応用

後 藤 知 己・山 城 亜梨沙・山 本 夏 海

Survey on actual condition of cosmetic disorders in adolescence and
its application to health guidance

Tomomi GOTOH, Arisa YAMASHIRO and Natsumi YAMAMOTO

(Received November 29, 2017)

1. はじめに

ピアス、ヘアカラーリング（染毛、脱色）、パーマ、化粧、足に合っていない靴、刺青（いれずみ、タトゥー）、美容整形など、種々の広義のおしゃれ行為による身体への障害が報告されている¹⁾。おしゃれ行為は、女性だけでなく男性も行っており、多くの人が普段から行っているものである。しかし、おしゃれ行為は、時に身体に危険や悪影響を及ぼすこともあるため、正しい知識を持つことが重要である。

近年、子どももおしゃれ行為を行っており、化粧の低年齢化^{2),3)}が問題となっている。ヘアカラーリング剤や化粧品等は、ドラッグストア等で手軽に購入できることや、子ども用の化粧品が販売されていること等が、化粧の低年齢化につながっていると考えられる。また、近年は情報化社会であり、ネットなどで様々な情報を見聞きすることや、テレビ、雑誌等で未成年者が化粧等を行っていること等⁴⁾も関係していると考えられる。

消費者安全法第23条第1項の規定に基づく事故等原因調査報告書「毛染めによる皮膚障害」⁵⁾によると、消費者庁の事故情報データベース⁶⁾には、毛染めによる皮膚障害の事例が毎年度200件程度登録されている。2015年度のものでは、美容院での毛染めによる頭皮の痒み、痛み、かぶれや、毛染めによる顔面の痒み、腫れ、かぶれ等の症状が報告されている。インターネット調査（消費者安全調査委員会による全国の消費者3,000人に対する毛染めに関する意識調査 2015年度実施）⁵⁾の結果によると、毛染め剤使用前にパッチテストを実施したことがない消費者が7割以上を占め、また、毛染めによるアレルギーの可能性を知っていたにもかかわらず、軽微なかゆみや痛みを無視して毛染めを続けるうちに、重篤な症状が現れた事例が散見されるなど、多くの消費者

は、リスクを回避するための行動をとるまでには至っていない。消費者庁の事故情報データベースには、過去5年間で約1,000件の毛染めによる皮膚障害の事例が登録されている。登録された事例の内訳は、男女比は1:7で女性が多く、年代別では40歳代から60歳代までが全体の62.6%を占めた。毛染めによっておこる障害は、非アレルギー性のものでは、刺激性接触皮膚炎があり、アレルギー性のものでは、アレルギー性接触皮膚炎やアナフィラキシーがある⁵⁾。ヘアカラーリング剤の中では酸化染毛剤が最も広く使用されているが、主成分として酸化染料を含む。酸化染料は、毛髪の内部で過酸化水素水等の酸化剤によって酸化されることで発色し、色が定着する。酸化染毛剤に配合することができる物質のうち、酸化染料の役割を果たす代表的な物質として、パラフェニレンジアミン、メタアミノフェノール、パラアミノフェノール、トルエン-2, 5-ジアミン等があるが、これらの物質は、アレルギー性接触皮膚炎を引き起こしやすい物質でもある⁵⁾。また、低年齢のうちに酸化染毛剤で毛染めを行い、酸化染料との接触回数が増加すると、アレルギーになるリスクが高まる可能性があると考えられている⁷⁾。

子どもの皮膚は薄くて、表皮細胞の層の数はだいたい成人の半分くらいしかいないため、外からの刺激に弱く、バリア機能が成人に比べて弱い。そのため大人よりも子どもの方が、おしゃれ行為によって身体に危険や悪影響を受けやすい⁸⁾、と考えられる。近年子どものおしゃれ行為が身近になっているため、学校においては、児童生徒の発達段階に応じて、おしゃれ障害に対する正しい知識を伝えていかなければならない。児童生徒の誤った、もしくは過度なおしゃれ行為によるおしゃれ障害を防止するためには、校則違反としての生徒指導、生活指導を行うだけでなく、おしゃれ障害に関連付けた生徒指導や保健指導、または掲示物による周知に努めなければならない。初等、中等教育を終え、女子を中心に多くの者

* 熊本大学教育学部 養護教諭養成課程

がおしゃれ行為を始める前に、おしゃれ障害を防ぐための知識を得ることも重要である。

本研究では、一般に広く普及しているヘアカラー（染色）に焦点をあて、大学生のおしゃれ障害の実態と、小中高生時代の学校でのおしゃれ障害に関する指導の有無について調査を行った。養護教諭は、学校において児童生徒の心身の健康を守る専門的な立場から、児童生徒の誤ったおしゃれ行為による身体への危険や悪影響を防ぐために、保健指導や掲示物の作成、保健だより等を通して積極的に対応し、他の一般教員とも協力していかなければならない。この研究を通して、おしゃれ行為に対する実態把握をし、学校現場で養護教諭は専門的な立場からどのような指導をすべきかを考察した。

2. 研究方法

1) 調査対象及び調査期間

調査対象

研究目的、研究方法について口頭または書面で説明し、匿名および、ほかの目的に使用しないとの条件で、協力に同意していただいた熊本大学の学部・に在籍する学生の方を対象とした。

調査対象者の内訳は、表1のとおりである。

(表1) 回答者の内訳

学校	学部	男	女	合計
熊本大学	教育 (養教以外)	38人	22人	60人
	養護教諭	1人	99人	100人
	計	39人	121人	160人

(養護教諭養成課程)

学年	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
人数	29人	21人	22人	28人	100人

(その他の教育学部)

学年	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
人数	0人	0人	0人	60人	60人

(男女別)

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
男	0人	0人	1人	38人	39人
女	29人	21人	21人	50人	121人

調査期間

平成28年11月28日～12月9日

2) 調査内容

自記式調査にて実施した。調査内容は、以下の4

項目に分類される。

- (1) 回答者の属性
- (2) ヘアカラー使用の経験
- (3) ヘアカラー使用によって健康被害を受けた経験
- (4) ヘアカラー使用に関して、これまでに受けた教育、指導

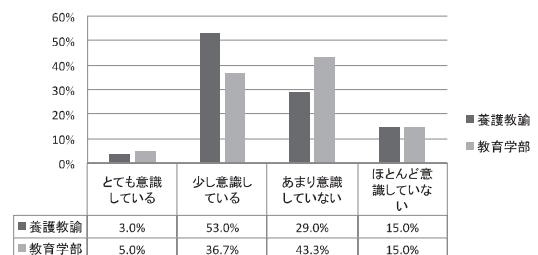
3) 検定方法

本研究を進めるにあたって、アンケートの結果のデータを危険率5%で検定を行った。用いた検定方法は、 $m \times n$ 分割表、マン・ホイットニーである。

3. 結果

ヘアカラー（染色）使用経験は、養護教諭養成課程で81.0%、その他の教育学部（以下、教育学部）で70.0%であった。（問4の結果参照）女子に限ると、ヘアカラー経験者は、養護教諭養成課程で80.8%、その他の教育学部で90.9%であった。男性（養護教諭養成課程の1名を含む）では、ヘアカラー経験者は、59.0%であった。男性でもヘアカラー経験者が多数を占めていることが分かる。以下では、養護教諭養成課程（以下、養護教諭養成課程と表記）と教育学部（養護教諭養成課程以外、以下、教育学部と表記）で各々アンケート結果の集計を行い、大学入学後におしゃれ障害や、児童生徒への指導について学ぶ機会が多いと考えられる養護教諭養成課程と今後学校現場で教育に携わり指導を行う教育学部の学生を比較し、大学入学後の教育効果や、教育学部に在籍することによる意識向上の可能性について解析した。

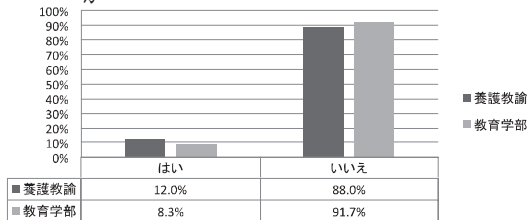
問1 ヘアカラーによる身体への影響や危険性へのあなた自身の意識について



問1としてヘアカラーによる身体への影響や危険性への自身の意識について尋ねた。（養護教諭100名、教育学部60名）養護教諭では「少し意識している」と答えた学生が最も多く53.0%（53名）で、次に「あまり意識していない」と答えた学生が29.0%（29名）であった。教育学部では「あまり意識していない」

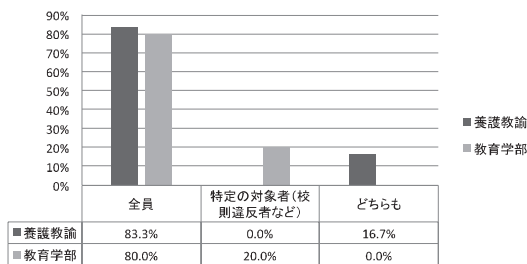
と答えた学生が最も多く43.3% (26名) で、次に「少し意識している」と答えた学生が36.7% (22名) であった。養護教諭と教育学部で有意差は見られなかった。両群ともにあまり意識は高くない、ようである。

問2 今まで学校(小・中・高)においてヘアカラーについての指導を受けたことがあるか



問2として、今までの学校でのヘアカラーについての指導の有無について尋ねた。(養護教諭100名、教育学部60名) 指導を「受けたことがある」と答えた学生は、養護教諭で12.0% (12名)、教育学部で8.3% (5名) であった。指導を受けたことがあるという人は学科によらず、10%前後でかなり少ないことが分かる。養護教諭と教育学部で有意差は見られなかった。

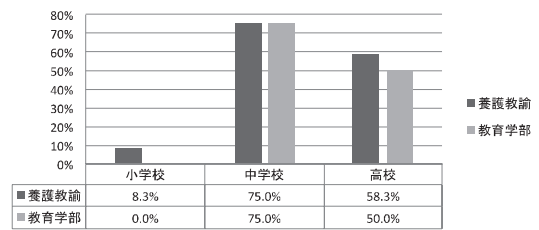
Q1 その指導の対象について



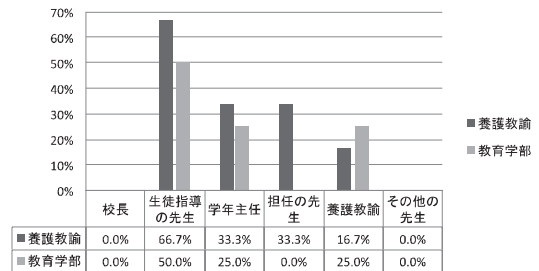
問2において、指導を受けたことがある学生(養護教諭12名、教育学部5名)に対してのみ、Q1としてその指導の対象について尋ねた。どちらも「全員を対象とする指導」と答えた学生が多く、養護教諭は83.3% (10名)、教育学部は80.0% (4名) であった。養護教諭と教育学部で有意差は見られなかった。

問2において、全員を対象に指導を受けたことがある学生(養護教諭12名、教育学部4名)に対してのみ、Q2として指導の時期について尋ねた。(複数回答可)「小学校のとき」と答えた学生は、養護教諭で8.3% (10人)、教育学部で0.0% (0名)、「中学校のとき」と答えた学生は、養護教諭で75.0% (9名)、教育学部で75.0% (3名)、「高校のとき」と答えた学生は、養護教諭で58.3% (7名)、教育学部で50.0% (2名) であった。養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった。指導は、中学校、高等学

Q2 その指導の時期について(複数回答可)



Q3 誰から指導を受けたか(複数回答可)

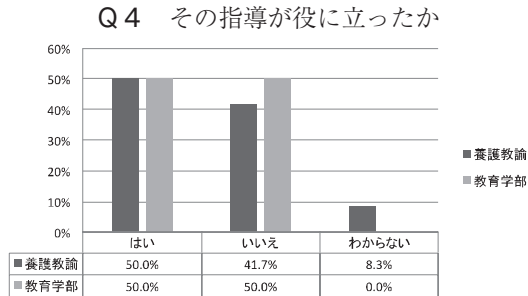


校において全員を対象に行われることが多いことが分かった。

問2において、全員を対象に指導を受けたことがある学生(養護教諭12名、教育学部4名)に対してのみ、Q3として誰から指導を受けたかについて尋ねた。「生徒指導の先生からの指導」と答えた学生が最も多く、養護教諭で66.7% (8名)、教育学部で50.0% (2名)、「学年主任からの指導」と答えた学生は、養護教諭で33.3% (4名)、教育学部で25.0% (1名)、「担任の先生からの指導」と答えた学生は、養護教諭で33.3% (4名)、教育学部で0.0% (0名)、「養護教諭からの指導」と答えた学生は、養護教諭で16.7% (2名)、教育学部で25.0% (1名) であった。養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった。専門的な知識をもつ養護教諭から指導を受ける機会は少ないことが分かった。

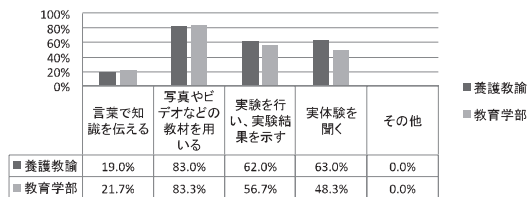
次に、今まで学校(小・中・高)において全員を対象に指導を受けたことがある学生(養護教諭12名、教育学部4名)に、その指導の主な内容について尋ねた。その結果、「髪を染めてはいけない」、「染色液で肌がかぶれるなど」、「高校生であるからしてはいけない(社会的に)」、「ヘアカラーをしてきた人が怒られた」、「茶髪はだめ」、「髪を染めてはいけない」、「髪のダメージを大きく受ける」、「赤ちゃんなどに影響する」、「長期休みの前に生徒指導の先生から髪を染めないように」、「生徒指導の一環として」、「若いうちから染髪したら良くない等」、「染めると高校全体の印象が悪くなる」、「本来の自分の姿を大切にしなければならない」、「覚えていない」、「染めては

いけない」といった回答であった。この結果から、ヘアカラーについての指導は、ヘアカラーをしてはいけないといった指導だけではなく、指導を受けた場合には、ヘアカラーによる身体への影響や危険性についても指導が行われていると判断される。



問2において、全員を対象に指導を受けたことがある学生（養護教諭12名、教育学部4名）に対してのみ、Q4としてその指導が役に立ったのか尋ねた。「役に立った」と答えた学生は、養護教諭で50.0%（6名）、教育学部で50.0%（2名）であった。どちらも半数が「役に立った」と感じていることが分かるが、反対に約半数の学生が「役に立たなかった」、「わからない」と感じている事が分かる。ヘアカラーについての指導は、ヘアカラーをしてはいけないといった指導では、児童生徒が納得しないと判断される。養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった。多くの児童生徒が役に立ったと感じてくれるように、指導方法・指導内容に改善の余地があると判断される。

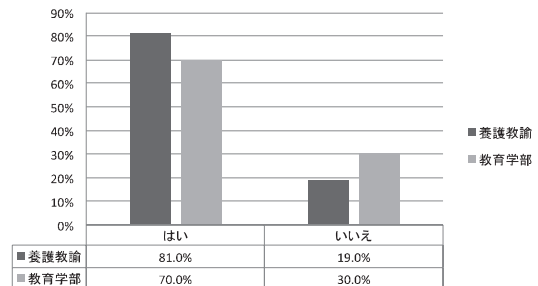
問3 ヘアカラーについてどのような指導があればヘアカラーの身体への影響や危険性についての理解が深まると思うか（複数回答可）



問3として、ヘアカラーについてどのような指導があればヘアカラーの身体への影響や危険性について理解が深まると思うかについて尋ねた。（養護教諭100名、教育学部60名）どちらも「写真やビデオなどの教材を用いる」と答えた学生が最も多く、養護教諭で83.0%（83名）、教育学部で83.3%（50名）であった。養護教諭で次に多かったのが「実体験を聞く」と答えた学生で63.0%（63名）、次に「実験を行

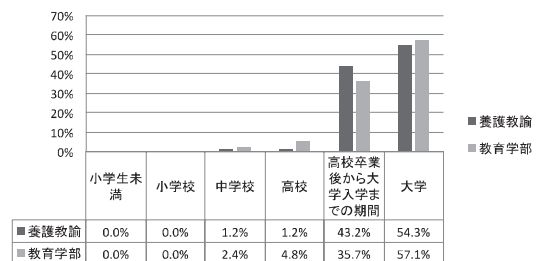
い、実験結果を示す」と答えた学生で62.0%（62名）であった。教育学部で次に多かったのが「実験を行い、実験結果を示す」と答えた学生で56.7%（34名）、次に「実体験を聞く」と答えた学生で48.3%（29名）であった。どちらも「言葉で知識を伝える」と答えた学生が最も少なく、養護教諭で19.0%（19名）、教育学部で21.7%（13名）であった。この結果から、言葉で知識を伝えるよりも写真やビデオなどの教材を用いるなど視覚的に訴えることが重要だと判断される。この質問について養護教諭と教育学部で有意差は見られなかった。

問4 ヘアカラー（染色）をしたことがあるか



問4として、ヘアカラーの経験の有無について尋ねた。（養護教諭100名、教育学部60名）どちらも「はい」と答えた学生が多く、養護教諭で81.0%（81名）、教育学部で70.0%（42名）であった。この結果から、大部分の学生がヘアカラーの経験があることが分かった。養護教諭と教育学部で有意差は見られなかった。

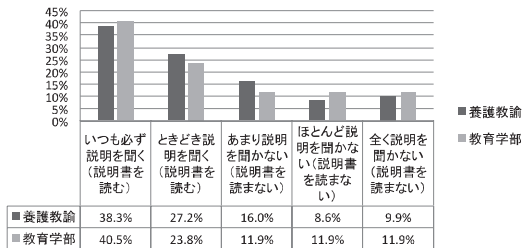
Q5 初めてヘアカラーをしたのはいつか



問4でヘアカラーの経験があると答えた学生（養護教諭81名、教育学部42名）に対してのみ、Q5として初めてヘアカラーしたのがいつかを尋ねた。どちらも「大学」と答えた学生が最も多く、養護教諭で54.3%（44名）、教育学部で57.1%（24名）であった。次に「高校卒業後から大学入学までの期間」が多く、養護教諭で43.2%（35名）、教育学部で35.7%（15名）であった。ほとんどの学生が高校卒業後に初めてヘアカラーを経験していることが分かった。養護教諭と教育学部で有意差は見られなかった。

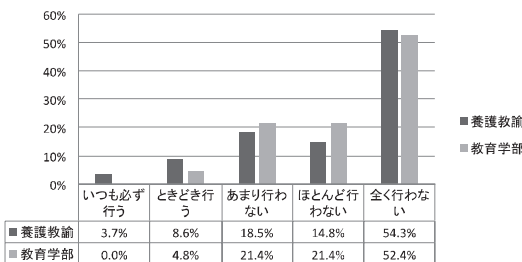
問4でヘアカラーの経験があると答えた学生（養

Q 6 ヘアカラー剤を使用するときの説明（説明書）について



護教諭81名，教育学部42名）に対してのみ，Q 6としてヘアカラー剤を使用するときの説明（説明書）について尋ねた．どちらも「いつも必ず説明を聞く（説明書を読む）」と答えた学生が最も多く，養護教諭で38.3%（31名），教育学部で40.5%（17名）であった．「ときどき説明を聞く（説明書を読む）」と答えた学生が次に多く，養護教諭で27.2%（22名），教育学部で23.8%（10名）であった．しかし，養護教諭，教育学部とも「あまり説明を聞かない（説明書を読まない）」，「ほとんど説明を聞かない（説明書を読まない）」，「全く説明を聞かない（説明書を読まない）」と回答した学生が約30%以上もいることが分かった．説明を聞く大切さの指導も重要である，と考えられる．養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった．

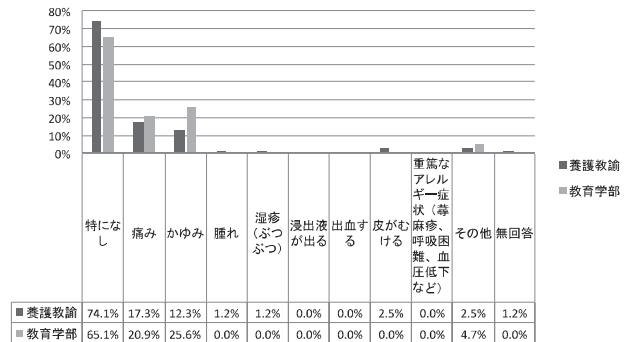
Q 7 自分自身でネットなどを用いて成分や危険性などについて調べるか



問4でヘアカラーの経験があると答えた学生（養護教諭81名，教育学部42名）に対してのみ，Q 7として自分自身で成分や危険性などについて調べるか尋ねた．どちらも「全く行わない」と答えた学生が最も多く，養護教諭は54.3%（44名），教育学部は52.4%（22名）であった．多くの学生が自分自身で成分や危険性などについて調べることがないことが分かる．養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった．

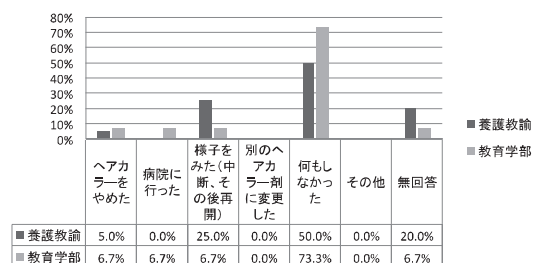
問4でヘアカラーの経験があると答えた学生（養護教諭81名，教育学部42名）に対してのみ，Q 8としてヘアカラー剤によって現れたことのある症状について尋ねた．どちらも「特になし」と答えた学生

Q 8 ヘアカラー剤によって現れたことのある症状について（複数回答可）



が最も多く，養護教諭は74.1%（60名），教育学部は65.1%（27名）であった．養護教諭はその次に「痛み」17.3%（14名），「かゆみ」12.3%（10名）と続いた．教育学部はその次に「かゆみ」25.6%（11名），「痛み」20.9%（9名）と続いた．養護教諭では，症状が出た学生が合計約30%，教育学部では症状が出た学生が合計約50%いた．この結果から，かなりの学生がヘアカラーによって症状が現れた経験がある，ということが分かった．この点からも，化粧品による健康障害に関する教育・指導の必要性が強く感じられる．養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった．

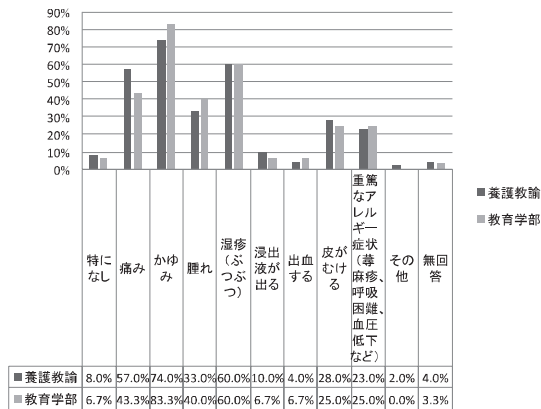
Q 8(2) その後どうしたか



Q 8において，症状が現れたことがあると答えた学生（養護教諭20名，教育学部15名）を対象に，Q 8(2)としてその後どうしたか尋ねた．どちらも「何もしなかった」と答えた学生が最も多く，養護教諭は50.0%（10名），教育学部は73.3%（11名）であった．養護教諭は「様子をみた」学生が25.0%（5名），「ヘアカラーをやめた」と答えた学生が5.0%（1名）であった．教育学部は「ヘアカラーをやめた」，「病院に行った」，「様子をみた」がそれぞれ6.7%（1名）であった．「何もしなかった」と回答した学生が養護教諭，教育学部とも半数以上であり，症状によっては，重篤なものもあるため，ヘアカラーについての指導を行っていくことが重要である．

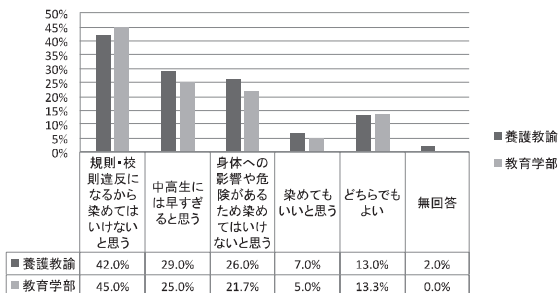
問5として，ヘアカラーを行うことによって身体にどのような危険があると思うか尋ねた．（養護教

問5 ヘアカラーを行うことによって身体にどのような危険があると思うか（複数回答可）



論100名，教育学部60名）どちらも「かゆみ」と答えた学生が最も多く，養護教諭は74.0%（74名），教育学部は83.3%（50名），その次に「湿疹」と答えた学生が養護教諭は60.0%（60名），教育学部は60.0%（36名），「痛み」と答えた学生が養護教諭は57.0%（57名），教育学部は43.3%（26名）であった．養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった．両群とも，ヘアカラーで体に障害が起こる可能性があることは，比較的良好に認識していることが分かった．

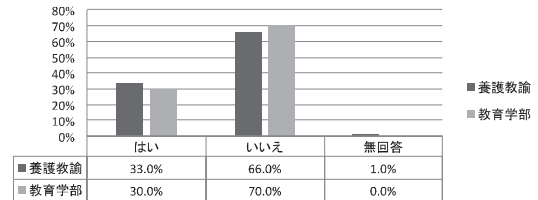
問6 中高生が髪を染めることについてどう思うか（複数回答可）



問6として中高生が髪を染めることについてどう思うか尋ねた．（養護教諭100名，教育学部60名）どちらも「規則・校則違反になるから染めてはいけないと思う」と答えた学生が最も多く，養護教諭が42.0%（42名），教育学部45.0%（27名），その次に「中高生に早すぎると思う」と答えた学生が養護教諭は29.0%（29名），教育学部は25.0%（15名），「身体への影響や危険があるため染めてはいけないと思う」と答えた学生が養護教諭は26.0%（26名），教育学部21.7%（13名）と続いた．「染めてもいいと思う」と答えた学生が養護教諭は7.0%（7名），教育学部は5.0%（3名），「どちらでもよい」と答えた学生が養護教諭は13.0%（13名），教育学部は13.3%（8名）であった．養護教諭と教育学部では有意差は見られ

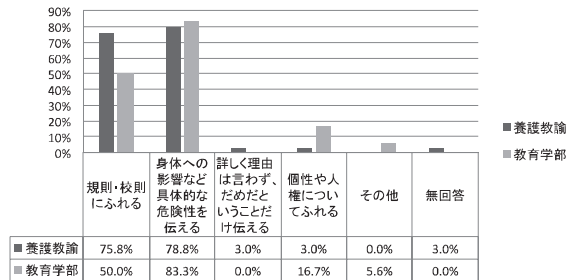
なかった．大部分の学生は，中学・高校生が髪を染めることに否定的な考えを持っていることが分かった．

問7 学校で児童生徒が，なぜ染色をしたらいけないのかを聞いてきたとき，教師として児童生徒が納得できるような説明をすることができると思うか



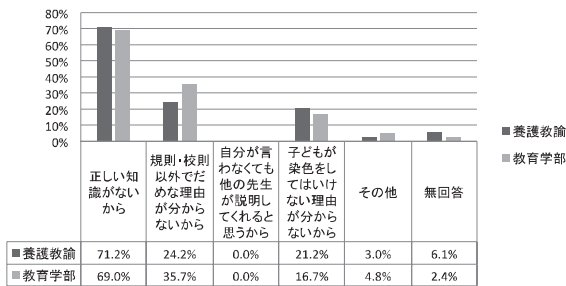
問7として，学校で児童生徒が，なぜ染色をしたらいけないのかを聞いてきたとき，教師として児童生徒が納得できるような説明をすることができると思うか尋ねた．（養護教諭100名，教育学部60名）どちらも「いいえ」と答えた学生が多く，養護教諭は66.0%（66名），教育学部は70.0%（42名）であった．この結果から，半数以上の学生が児童生徒に対して納得できるような説明をすることができないと考えていることが分かった．養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった．専門的な知識を習っているはずの養護教諭の学生も，多くは自信が持てないことが分かった．

Q9 どのような内容で説明するか（複数回答可）



問7において，説明ができる答えた学生（養護教諭33名，教育学部18名）を対象に，Q9としてどのような内容で説明するか尋ねた．どちらも「身体への影響など具体的な危険性を伝える」と答えた学生が最も多く，養護教諭は78.8%（26名），教育学部は83.3%（15名）であった．次に「規則・校則にふれる」と答えた学生が養護教諭は75.8%（25名），教育学部は50.0%（9名）であった．この結果から，説明できると回答した学生のほとんどがヘアカラーの具体的な危険性を伝えることができると判断していることが分かった．養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった．指導の際，校則に触れることは大事だが，なぜそのような規則があるのかを納得で

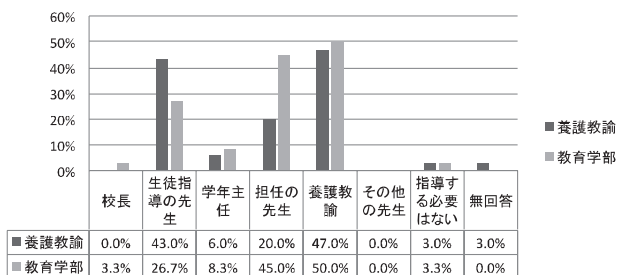
Q10 説明ができないと思った理由について（複数回答可）



きるように、児童・生徒に説明できるようになることが重要ではないかと考えられる。

問7において、説明ができないと答えた学生（養護教諭66名、教育学部42名）を対象に、Q10として説明ができないと思った理由について尋ねた。どちらも「正しい知識がないから」と答えた学生が最も多く、養護教諭は71.2%（47名）、教育学部は69.0%（29名）であった。そのつぎに「規則・校則以外でだめな理由が分からないから」と答えた学生が養護教諭は24.2%（16名）、教育学部は35.7%（15名）、「子どもが染色をしてはいけない理由が分からないから」と答えた学生が養護教諭は21.2%（14名）、教育学部は16.7%（7名）であった。この結果から、多くの学生がヘアカラーについての正しい知識を身につけていないということが分かった。養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった。この調査の対象は、将来、教員を目指している学生であるので、指導に必要な知識を身につけることは重要である、と考えられる。

問8 学校で染色についての指導は誰がしたら最も効果的だと思うか（複数回答可）



問8として、学校で染色についての指導は誰がしたら最も効果的だと思うか尋ねた。（養護教諭100名、教育学部60名）どちらも「養護教諭」と答えた学生が最も多く、養護教諭は47.0%（47名）、教育学部は50.0%（30名）であった。養護教諭は「生徒指導の先生」と答えた学生が次に多く43.0%（43名）、その次が「担任の先生」20.0%（20名）、「学年主任」6.0%

（6名）と続いた。教育学部は「担任の先生」と答えた学生が次に多く45.0%（27名）、「生徒指導の先生」26.7%（16名）、「学年主任」8.3%（5名）と続いた。この結果から、多くの学生が染色についての指導は、生徒指導の先生や担任の先生、養護教諭などが行うと効果的であると考えていることが分かった。養護教諭と教育学部では有意差は見られなかった。養護教諭は、専門的な知識をもつ教員として、かなり期待されていることがわかる。

4. 考 察

本研究の調査では、回答学生の76.9%がヘアカラーをした経験があった。男女を問わず多くの学生が毛髪の染色の経験があることがわかる。しかし、大久保らの調査研究⁹⁾でも中学生のヘアカラーや装身具などのおしゃれによる障害の認知度は5.5%であり、小中学校の教師のおしゃれ障害の認知度は12.0%とかなり低い認知度が報告されている。このことから、おしゃれ障害の認知度は児童生徒、教師に関わらず低いことが分かる。それに対して本研究の調査で、将来教師になるであろう熊本大学の教育学部の学生に、おしゃれ障害の認知度についてアンケートをとったところ、おしゃれ障害という言葉聞いたことがないと回答した学生が、養護教諭養成課程は58.0%、その他の課程は、91.7%であり、養護教諭養成課程の学生は講義や実習で聞く機会があるにもかかわらず、おしゃれ障害というものの認知度は50%以下であった。

学校現場でのおしゃれ行為についての指導経験については、90%程度の学生が指導を受けたことがないと答えた。指導を受けた経験者であっても、指導内容は生徒指導に関することが多く、専門的知識をもった養護教諭から指導を受けた経験は少ない。このことから、学校現場でのおしゃれ行為についての指導は徹底されておらず、おしゃれ行為に関する知識や情報を得る機会はまだ設けられていないと考えられる。指導を受けた経験のある学生でも、指導が役に立ったと答えた学生は半数程度であった。このことから、指導が行われていたとしても、内容が効果的ではないと推測される。

一般にヘアカラーでは皮膚が赤くかぶれる、かゆみや痛みが出る、というような症状が報告されている⁵⁾。また、成長期までの子どものおしゃれには大人より、アレルギー発症の引き金である感作がおりやすくなるというような問題もある。これは子どもの未熟で薄い皮膚に、化粧品や金属を接触させると、皮膚の内部、体の内部に、それに含まれる化学

物質が入りやすくなるためである¹⁰⁾。しかし、おしゃれ障害は保健体育科指導要領では、必須内容ではない、のが実情である。大学の教員養成系教育においても、養護教諭養成課程以外では、おしゃれ障害について、その内容も、指導方法も学習する機会はない。今回のアンケートでも明らかなように、従来の学校現場でのおしゃれに対する指導は、学校の規則だから禁止する、というものが多くある。なぜ禁止されているのか、おしゃれにはどんな問題があるのか、大人のおしゃれは認められるのに、なぜ、子供ではいけないのか、といった子供を納得させるための部分が欠けているように思われる。そこで、専門知識を持つ養護教諭が中心的な役割を果たして、おしゃれを始める前の児童・生徒への指導を行うことが必要であろう。さらに、他の教員に対しても、おしゃれ障害についての理解が深まるよう、配付物や校内研修の充実を図り、学校と家庭が一体となった健康教育を推進していく必要がある。

本調査からも、ヘアカラーの身体への影響や危険性への意識を高めるには言葉で知識を伝えるだけでなく、実際に写真やビデオを見せて視覚的に訴えたり、どのような症状が現れるのかを、実験を通して学んだりなど、具体的にわかりやすく子どもたちに伝えることが求められている、と考えられる。その指導の際には、健康問題の専門家である養護教諭が効果的な教材を提供することが重要であろう。学校現場では、養護教諭が中心となり、児童生徒への保健指導や周知徹底のための掲示物作成に積極的に取り組み、保護者への助言を行うことが求められる。さらに、他の教員に対しても、化粧品や装飾具使用による障害についての理解が深まるよう、配付物や校内研修の充実を図り、学校と家庭が一体となった健康教育を推進していく必要がある。

5. 謝 辞

本研究を進めるにあたり、アンケート調査にご協

力頂きました熊本大学教育学部学生の皆様に、心から感謝いたします。

参考文献

- 1) 神奈川県医師会HP：おしゃれによる障害，1-8，2007
<http://www.kanagawa.med.or.jp/ibukai/gakkoui/osyar-eniyorusyougai.pdf>
- 2) 島崎千江子，吉野鈴子：女子学生ファッション導入行動とライフスタイルの関連について，大手前短期大学研究集録，31，27-55，2011
- 3) ポーラ文化研究所：年代別にみる化粧アイテム初使用状況，化粧と生活のレポートNo. 101，2008
<http://www.po-holdings.co.jp/csr/culture/bunken/report/pdf/080303hatsusuiyou.html>
- 4) 石田かおり：わが国における化粧の社会的意味の変化について－化粧教育のための現象学的試論－，駒沢女子大学 研究紀要，14，13-24，2007
- 5) 消費者庁消費者安全調査委員会：消費者安全法第23条第1項の規定に基づく事故等原因調査報告書 毛染めによる皮膚障害，2015
http://www.caa.go.jp/csic/action/pdf/8_houkoku.pdf
- 6) 厚生労働省HP：アレルギー疾患の現状等，2016
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10905100-Ke-nkoukyoku-Ganshippeitaisakuka/0000111693.pdf>
- 7) 厚生労働省HP：「毛染めによる皮膚障害」に係る消費者庁消費者安全調査委員会から厚生労働大臣に対する意見について，2015
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iya-kushokuhinkyoku-Soumuka/0000106367.pdf>
- 8) 資生堂：子どものスキンケア，2007
https://www.shiseidogroup.jp/rd/doctor/informationletter/backnumber/pdf/2007_001_01.pdf
- 9) 大久保香梨，斎藤ふくみ：小中学生のおしゃれに関する研究－主におしゃれ障害に関して－，茨城大学教育学部紀要，63，219-230，2013
- 10) 岡村理栄子：おしゃれ障害，少年写真新聞社，2003